

FOCUS UP WIDE

アマの絶対女王として君臨した向谷美咲の第二章



コロナ禍のなか米挑戦で
自らの現在地を再確認

10代のころからJBCのビッグタイトルを総なめにし、10年間にわたりナショナルチームの中心メンバーとして活躍してきた向谷美咲。2018年を最後にJBCを退会、その後はコロナ禍もあって、動静がほとんど聞こえてこなかったが、今年7月21日から約1カ月半、アメリカ・PWB Aツアーに参戦してきたという。帰国後2週間の自主隔離期間を終えたばかりの8月20日、勤務するVEGA八千代店(千葉県八千代市)におじゃまして話を聞いた。

刺激もらった
アメリカ遠征

2020年4月7日からの最初の緊急事態宣言時には、2カ月余り完全にボウリングから離れ、その後も約1年半、試合への出場がなかった。

「ボウリングを始めて以来、こんなに投げなかったのは初めての経験でした。今振り返ると、かえってボウリングと向き合う時間になったので、必要な時間だったなと思います」

そのブレイク期間が、アメリカ挑戦への背中を押した。東京オリンピック開幕直前の7月21日に単身渡米した。

「アメリカに挑戦するのは、小さいころからのひとつの夢でした。レベルアップをするためにいろんな経験をしたいのと同時に、今の自分がどこまでやれるのかを確認したかった。それにしてもボウリング場でもマスクをしているのは、私のほかにはメキシコやカナダからきている選手など数人で、国民性の違いなのか、本当にコロナなの？って感じていた。他にも時間に対する感覚の違いなど、日本で育ってきた私には戸惑うことも多かった。その一方で、ボウリングに対する熱さをすごく感じました。情報交換は当たり前だし、聞けば熱心に何でも答えてくれる。お互いに高め合おうという感じは、鳥肌が立つくらいの新鮮な感覚でした」

今回の遠征では、US女子オープンを含む6試合に出場した。PWB Aのトーナメントは、公式練習の始まる30分前にレーンコンディションの発表があるそうで、向こうのプロがどんどん新しいボールをドリルして対応していくさまに圧倒されたという。そんななかでも、初戦のダブルス戦を除く5試合で予選通過を果たし、ある程度

手応えも感じた。

「そのうちの3試合は2日間大会で、同じ会場1週間で行われましたが、2戦目が6位、3戦目が8位と、あと一歩で4名が進む決勝ステップラダー進出を逃し、悔しかったですね。最後のUS女子オープンでは19位でした。もちろんもっといい成績が欲しかったけど、現状これくらいやれるんだということを確認できたという意味では、よかったと思います」



▲ラトビア出身でPWB Aのタイトルホルダーでもあるダイアナ・ザハロフ選手と。「選手だけでなくいろんな方と接して、自分の存在を知ってもらえたことが、今回の遠征のいちばんの収穫」

キャプテンとして
苦しみ抜いた4年間

小学5年生でJBCに入会以来、ボウリング一筋にまい進してきた。とくに高校2年でユースナショナルチーム入りしてからは、生活の中心には常にボウリングがあった。

「国際大会は、行けるものはほとんど全部行かせていただいて、普通ではできないような経験をたくさんさせてもらいました」

ナショナルチームは4年に一度行われるアジア競技大会を軸にチーム作りが行われるが、2018年8月にインドネシアで行われたアジア競技大会の4年

前に、女子チームのキャプテンに指名された。アジア競技大会は3度目の出場、その都度置かれた立場も違えば、かける思いも違った。なかでも「キャプテンとしてチームをまとめ、海外でどのくらいやれるかというのが、私の最終目標」と、3度目のアジア競技大会にかける思いは特別なものがあつたが、それが強すぎたのだろうか、理想と現実のギャップに苦しんだ。

「チームを作り上げていくには、まず自分がしっかりしないといけないけど、その4年間海外ではまったく成績を残せませんでした。最後のマスターズに残れないのが、当たり前のようになっていて、そんな自分がキャプテンをやっていることが許せなくて、常に葛藤がありました」

ある程度自由に時間の管理ができた学生時代と違い、社会人になって次第に責任ある仕事を

任せられるようになるとともに、ボウリングに向き合う時間が削られていくことへの焦りもあった。

「国際大会から帰ってきては、こういう練習をしてみよう、チームに対しては、もっとこういう伝え方をしようとか、毎回違うことを試してみただけ、どれもはまらなかったですね。でもチームメイトに悩んでいる姿は見せられない。ゴメンねと思いつつ、心を鬼にしてきついことを言ったこともあります。チームのみんなには嫌な気持ちにさせたこともあったと思うので、申し訳ないという気持ちがあります」

チャンスがきたら
死に物狂いで...

2018年のアジア競技大会後、ボウリングとは一旦距離を置くことを考えた時期もあったそうだが、アメリカに挑戦するという子供のころからの夢が、それを思いとどまらせた。JBCの規程が変わり、プロとの掛け持ちが許されるようになって、PWB Aのライセンスを保持したまま、今年2年ぶりにJBCにも復帰した。

「千葉県連さんが戻ってくることに、早く受け入れて下さってありがたかったです。国体の関東ブロック予選は1位で

出場枠を確保できたのに、国体自体が中止になってしまい残念です。JBCの大会も、過去の成績は関係なくて、出る大会でいちばん高いところを目指そうと思っています」

海外への挑戦については、コロナ禍で計画を立てようにもなかなか先が見通せない状況だ。

「そのときの状況に柔軟に対応していくしかないですね。どの大会とはいわないけど、絶対にアメリカで1勝したいです。今年の挑戦では、ある程度我慢をすることはできたけど、決勝進出がかかるような場面で、も



▲メジャートーナメントであるUS女子オープンの会場となったカリフォルニア州のDouble Decker Lanes。遠征最後となったこの大会は19位だった

う一歩打ち負けないような力が必要だなと感じました。来年行くことができたら、死に物狂いで立ち向かうつもりです」

コロナ禍の渦中であつてモチベーションの維持が心配されたが、スイッチは常に戦闘モードのようだ。

「川添奨太プロのPBA挑戦に刺激もらったし、うらやましいなとも思いました。アメリカ挑戦はもちろん自分のためであるけど、女子でも日本の選手が海外に目を向けるきっかけになればいいという気持ちもあります。そのためには結果も必要だと思っています」



第48回全日本トリオフェスティバル

9月18・19日
星が丘ボウル

6歳の璃音ちゃんと谷口姉妹のトリオが快勝

新型コロナウイルスの影響でトーナメント数が減少しているせいもあってか、緊急事態宣言下にもかかわらず、100チームを超える参加があつた。厳重な感染予防策を講じた上で、密を避けるために4シフトに分けて予選を実施、各シフト上位4チーム、計16チームが決勝トーナメントに進んだ。

優勝決定戦まで勝ち進んだのは、今井・今村・大橋選手組(岐阜・関ボウリングセンター)と、谷口・河津・谷口選手組(大阪・牧野松園ボウル)の両チーム。とくに実績十分な姉・美優選手と妹・優依選手の谷口姉妹に、河津亨至プロ(44期)の6



▲谷口姉妹に挟まれた河津選手は、6歳とは思えないしっかりした投球フォームで、優勝の立役者になった

歳の娘さん・璃音選手のチームが、1G221のハンデキャップがあつたものの、2回戦776、準決勝791を打って、危なげ

なく勝ち上がってきた。優勝決定戦でもその勢いそのまま今井・今村・大橋選手組を747:672と圧倒して優勝を飾った。